

器械運動に関する研究を通して考える身体運動文化の意味 —なぜ、器械運動領域の学習が必要なのか—

福地 豊樹（元群馬大学）

日本において器械運動が学齢期の子どもたちの学習課題になって久しいが、近年、その学習実態がどのようにになっているか危惧を抱かざるを得ない状況が生じている。私事ながら、教員養成大学で保健体育専攻の学生の授業を担当していたことから見えた状況を少し報告したい。

まず、驚くことは、器械運動の学習は小学校段階の記憶しかなく、中学校の一年時に少しの時間を経験したのみという学生がほとんどである。さらに驚くことは、鉄棒の「逆上がり」と「後方支持回転（通称、後ろ回り）」の区別を説明することができず、その名称すら知らない保健体育専攻生の出現である。とび箱に至っては「開脚とび」、「かかえこみとび」の名称を知らない。中学校の体育教師の多くは器械運動の授業が不得意であり、小学校では、体育教材の理解は難しく、特に器械運動に関して、その知識を欠く教員が多い（群馬県が例外であるとは思えない）。したがって、上記の保健体育専攻生にみられるような理解を示す学生を作り出す授業の実際を想像することは難しいことではないと思われる。

ここでは、次の三点について報告を行う。ひとつは、昭和30年代、斎藤喜博の関わった島小学校に残された実践記録を紹介したい。とび箱の教材理解の一端を示す。二つには、

「倒立」描画の研究から導き出される「身体」理解の問題である。身体教育の意味内実が語られる。三つめは、日比谷公園で鉄棒を行うひとたちについてである。いずれも、すでに学会等で報告を行っている内容であるが、ここでは、器械運動という身体運動文化の意味について、三つの事例から導きだされることがらについて言及してみたいと考える。歴史的な研究やそれ以外の方法を含み、取り扱いに、いささか統一性は欠けはするが、身体運動文化（スポーツという言葉にかえることもできる）とわたしたちとの関係性を考える視座を有しており、そうした点に触れることの意義は大きいものと考える。